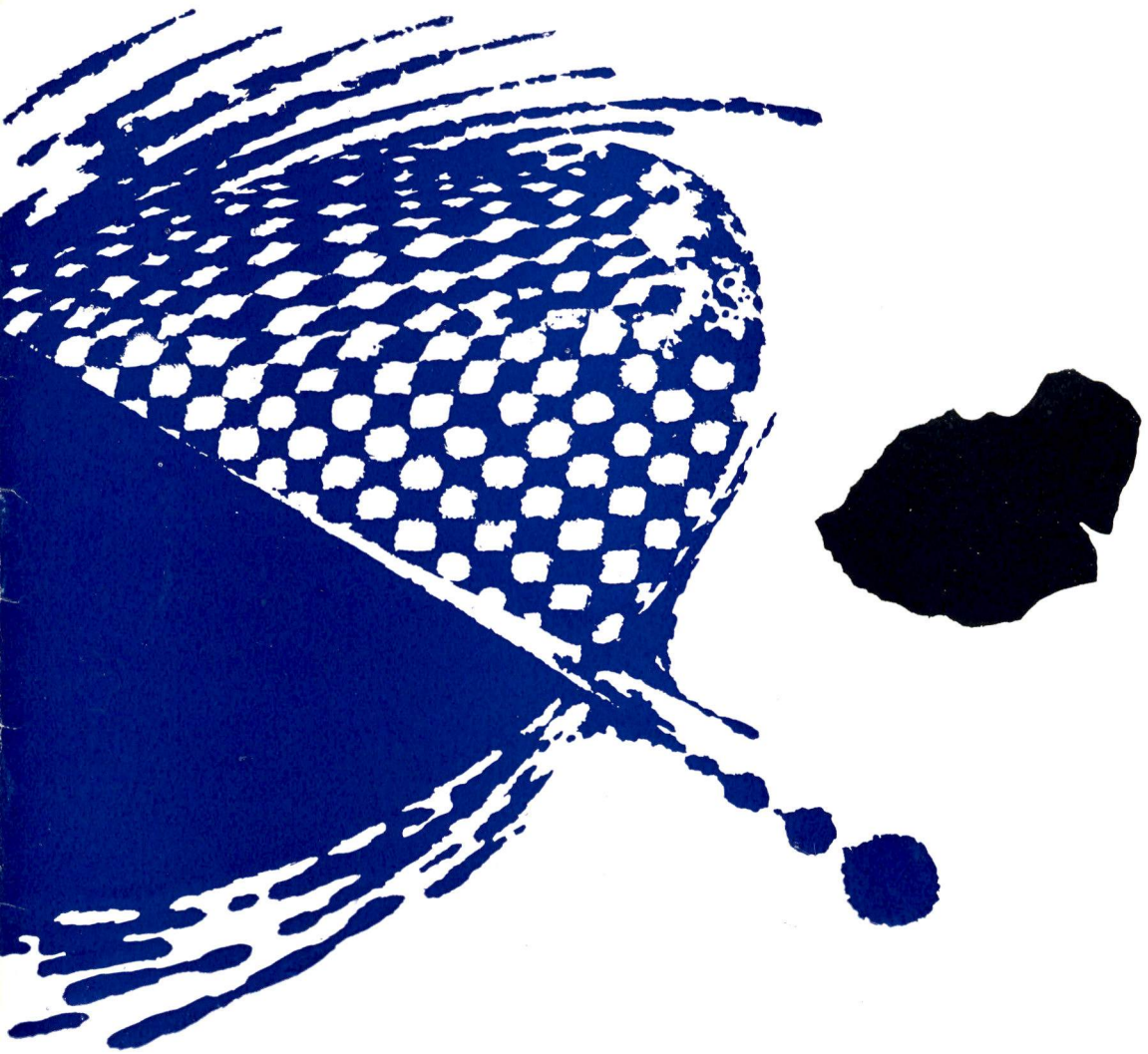
tokyo ro-on new symphony orchestra november 2th 1961

三大交響曲の夕

東京労音　新交響楽団第５回定期演奏会



東京労音　新交響楽団第５回定期演奏会

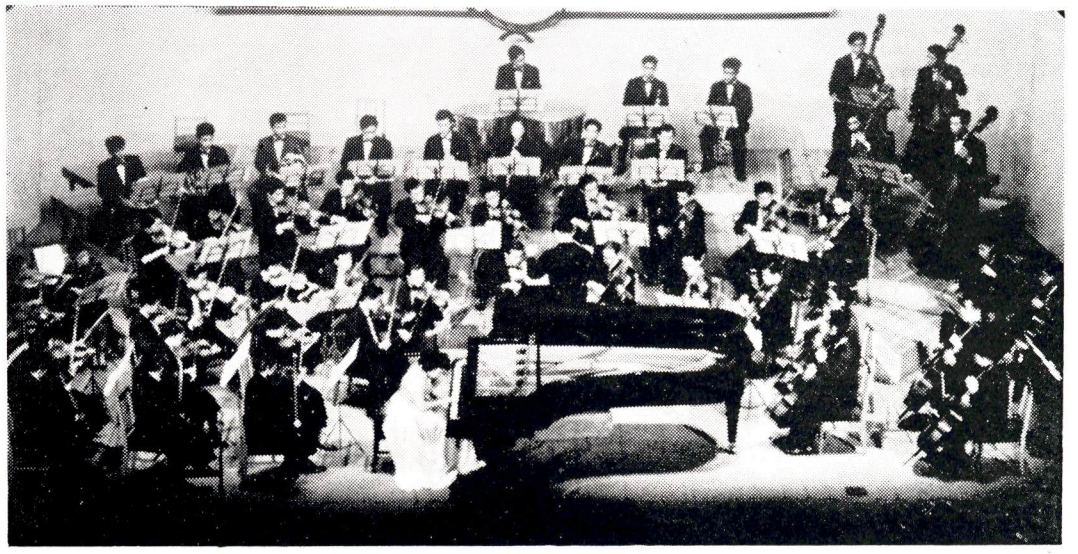
三大交響曲の夕

指揮　芥川也寸志

演奏　東京労音新交響楽団（第･1オーケストラ）

時　11月２日（木）　PM６.30開演

所　文京公会堂



謹んでこの演奏会を今は亡き田中徳夫氏に献げます

„徳さん" の名で親しまれ，新響発足以来委員長として団代表を勤めて来られた田中徳夫氏は，去る９月７日演奏会を待たず急逝されました。今日御来場の皆さんの中には，演奏終了後，小柄な体に，日鏡を掛けた童顔丸顔の徳さんが指揮台の上で御挨拶したのを御記憶の事と思います。

新響と云えば徳さんであり，徳さんあっての新響と云っても過言ではない程，今日の新響は徳さんの日覚しい努力によって築きあげられました。死の間際迄オーケストラを口にしていた徳さん。何処かで聞いていて呉れるでしょう。

謹んで君にこの演奏会を献げます。

PROGRAM

シューベルト

交響曲第八番ロ短調「未完成」

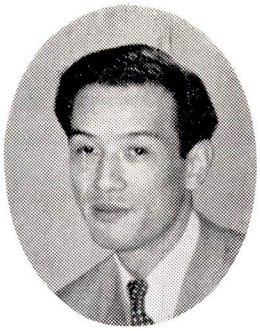
ドボルザーク

交響曲第五番ホ短調作品95「新世界より」

チャイコフスキー

交響曲第五番ホ短調作品64

ご・あ・い・さ・つ



芥川也寸志

今日はこのオーケストラを聴きにきて下さって本当に有難うございます。たとえ技はつたなくとも，みんなが一生懸命練習してきたその成果を温い気持で迎えてやって頂きたいと思います。

このオーケストラのメンバーは，すべて昼間は職場で働き，あるいは学校で勉強している人たちです。したがって，オーケストラとしての技術的向上には，おのずから一つの限度があります。しかし，アマチュア音楽における楽しさやよろこびや，張り合いというものは，その＜限度＞によってこそ，生れてくるものともいえましょう。ただ問題は，その限界の中に安住するか，あるいはその限界を常に意識し，それへの挑戦を試みるか，そのいずれの道を選ぶかということです。私は，アマチュアだから，という度々使われる「かくれみの」の如き言葉を好みません。それは単に自分自身への自己満足と，道楽的楽しみを生み出すことにしか役立たないからです。それればかりではなく，アマチュアリズムの本質に，最もそむく言葉でさえあります。下手でもよろしい。恥じず・怖れず，堂々と自己をうち出してゆけばいいのだと思います。

そういう点で，このオーケストラの連中は実にたのもしい。団結し，励ましあって，助けあって，いつも大きな目標に向うレールの上を，たとえ少しずつでも前進しようと一生懸命です。今日聴きに来て下さった皆様。どうか彼等の意気と情熱をお汲取り下さいますように。

私たちは，今与えられたこの一つの時間に総ての力を注ぎます。それが皆さまの心のどこかに，わずかでもふれあうことをひたすら祈りながら——。

新響のあゆみ

委員会

労音アンサンブルから新響えの脱皮，そしてその発展と，私達のオーケストラは創設以来6年間に次の様な三つの時期を経て，今日で第5回目の定期演奏会を迎えるに到りました。

1.新交響楽団の誕生

労音会員の有志が集まって出来上った労音アンサンブルも，メンバーを次第に増し，更に芥川也寸志さんを指揮者に迎えて，半年後には本格的な演奏団体に脱皮する準備が整えられました。

昭和31年8月団員総意の下に，労音アンサンブルは発展的解消を遂げ新たに「東京労音新交響楽団」が誕生しました。発足と同時に委員会が設けられ，団の企画運営制度が確立されました。

オーケストラに脱皮して直ちにしなければならなかったのは，演奏団体にとっては不可欠の，合奏技術の習得でした。そこで1年間を区切っ

■東京労音　新交響楽団

第一バイオリン

高倉　寿
木沢要二
鳥取博文
林　英治
松重玲子
岡部カヨ子
保刈八千代
平岩　林
高木明子
安藤美代子
林　誠
小林瑠美
阿部洋子

第二バイオリン

岡本賢二
滝沢久美子
内藤恵美子
日比吉子
田中卓美
杉浦康彦
吉岡初瀬
二宮伸雄



てその間一切の演奏活動を放棄してアンサンブル技術の習得に専念する事にしました。

2.演奏活動の開始

こうして1年間の練習期間を了えると，早速昭和32年11月の第1回定期演奏会を皮切に意欲的な演奏活動に入りました。

東京での都合3回の定期演奏会，会津，上田，熊谷労音の例会音楽教室えの出演，その他「日本のうた声」，「世界青年学生平和友好祭代表参加記念音楽会」e•t•cに出演等，約2年の間に多彩な演奏実績を作りました。

然しこの様に活発な演奏活動を続け，オーケストラが充実して来ると今迄の単一オーケストラ組織では，「誰でも何時でも入団出来るオーケストラ」である事を貫く事と，同時に高度の演奏技術を身に付けたオーケストラに成長する事を両立させるのは困難になって来ました。この問題は発足当初からの懸案でしたので約1年間に渡って，慎重に討議検討された結果，最良と思われる結論に到達しました。

3.二つのオーケストラ活動

結論は二つの目的の夫々一方に重点を置いたオーケストラを二つ作る事にしてこの問題を解決する事でした。

団員に或る程度の資格を求めて，演奏技術の向上と演奏活動に重点を置いた第1オーケストラと，無制限入団制度を継承して，特に合奏技術の習得に重点を置いた第2オーケストラが，一つの新交響楽団として新たに誕生しました。こうして新交響楽団は当面の壁を乗り越えて新たな段階に入ったのです。第1オーケストラは昨年の11月に第1回の演奏を行なって好評を博し，ついで今年の4月には第2オーケストラと共に第4回定期演奏会を開きました。又本日の第5回定期演奏会の後，熱海労音，秩父労音の例会，埼玉大学での出演が決まっています。

又第2オーケストラは第3オーケストラを分離して主体を演奏活動に移行する態勢を徐々に整えつつあり今月末には第1回定期演奏会を開く事が決まっています。

この様にして私達は困難を乗り越え，問題を解決しながら常に前進して来ました。第2オーケストラから第3オーケストラを作り上げ，そして第4オーケストラを作りながら先え先え伸びる為にも，皆様の中から一人でも多くの入団者を迎える事が出来る様願っています。

団員（第一）名簿

旭　正

ビオラ

天江光雄
栗林充生
有馬信行
木村斐夫
高木慶三
亀田美津子
行枝玉恵
河村恭子
丸山宮平

セロ

佐藤幸子
高山昌宣
飯島秀雄
升田俊樹
植草寛之助
岡崎武雄
白沢

コントラバス

郷　孝雄
若尾裕久

小貫幸子
上田　誠

フルート

松永　昇
滝口佐智子
平野　靖

オーボェ

前田音彦
岩川光一

テューバ

小牧稔旺

クラリネット

麻生泰正
阿部しづゑ
田中勝治
清原豊明

ファゴット

仙名　保
名井輝男

ホルン

関口賀正
徳川文武
斎藤好司
中村勝彦

トランペット

家合幹夫
新妻次郎
梅田武彦

トロンボーン

戸田昌宏
大和田　正
石原重宏

打楽器

山口保宣

指揮

芥川也寸志

曲　目
解　説



交響曲第八番「未完成」……シューベルト

この曲は旋律が非常に美しいこと，それに和声と音色の使いこなしが新鮮であることなどによって，我国だけではなく，広く世界でも最も人気のある交響曲の一つに数えられています。更にこの曲を有名にしたのは，この曲がシューベルトの25才の頃（1823年）に書かれたにも拘らず，彼の死後まで発表されず，しかもこれほどの名曲が途中までしか書かれていないということです。つまり「未完成」に終っているということです。そのため，その理由にはいろいろの憶説が出て，映画にも随分採り上げられました。しかし，実際のことはわからないというのが通説です。それはさておき，この三楽章と四楽章を持たない交響曲は，形式上では未完成かも知れませんが，内容的には完成されているというのも通説です。実際はシューベルトは第三楽章の途中までピアノ用スケッチを書いておりますし，その最初の小節だけはオーケストレイションさえされております。彼ほどの天才がどうしてそれを続けて書かなかったのかというよりは，彼が天才であるが故にその天才の直観によって，もうこの曲にどのようなスケルツオやフィナーレをつけても，かえって無用の長物になると思ったからではないでしょうか。それほどこの曲は一，二楽章だけで完成しているように思われるのです。

第一楽章　アレグロ・モデラート

ロ短調４分の３拍子の，簡単なソナタ形式で出来ている。冒頭に低音弦楽器が奏する旋律は，大指揮者ワインガルトナーが「あたかも地下の世界からのように」と評したところであるが，その最初の三音からなる動機が，第二楽章においても大きな役割を果している。地下の世界からの音が終るのを待ってヴァイオリンが，16分音符のこまかい第一主題を奏でる。そのあとファゴットとホルンの経過部を経て，第二主題が出るが，これも最初の動機を含んでいる。注目すべきは，この第二主題が，ロ短調に対するニ長調ではなくト長調だということであろう。最後は又ロ短調に戻ってきれいな和音で終る。

第二楽章　アンダンテ・コンモート

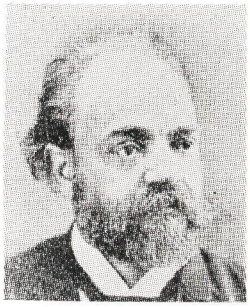
ホ長調８分の３のこの楽章は，同じものを二つ繰返してそのあとにコーダをつけたと見てよい。その第一部は云わば不規則な三部形式と考えられないこともない。最初コントラバスのピッチカートに伴われて第一ヴァイオリンが主題を奏で，それにチェロが美しく対位する。これの反復とみてよいだろう。中間に二度出てくる絃の長いシンコペーションをバックにした木管のソロの部分はこの楽章を最も特徴づけ，且つ清らかなものにしているところと云えよう。美しい見事なコーダのあとにはもう三楽章以下をつけ加える必要性を全く感じさせないだろう。

交響曲第五番「新世界より」……ドボルザーク

1892年から95年にかけて，ドボルザークは国民音楽院の院長としてアメリカに滞在しましたが，彼の作品のうち有名なこの第五交響曲をはじめ弦楽四重奏曲「アメリカ」やチェロ協奏曲といったものは，すべてこの期間に書かれております。これらの曲は，その殆んどに黒人霊歌やアメリカインデアンの旋律，リズムが素材として用いられておりますが，これは，彼がそれらに大きな興味を抱いたからというのではなく，むしろ，その中に故郷ボヘミアの民族音楽との近似性を見出したからではないでしょうか。さて「新世界より」という副題は「新世界」アメリカから「旧世界」たるヨーロッパえ宛てた便りとでもいうようなことでしょうか。曲は伝統的な形式からはずれることなく，ただ循環主題の手法を除いては特に目新らしいところもありませんが，優れた管弦楽法と，親しみ易い，いわゆる「ドボルザーク節」で全部が統一されております。

第一楽章　アダージョーアレグロ・モルト

曲は，低音弦楽器群の奏するホ短調８分の４拍子の序奏で始まるが，これは，単に第一楽章における序奏というよりは，この曲全体を綜合した序奏と云ってもよい。というのは，この序奏部には，全曲に有機的関連をもつ主題的な要素が含まれているからである。やがて，主部が，アレグロ・モルト，ホ短調４分の２拍子の軽快なリズムを刻み始め，すぐに民族的色彩の濃い第一主題へと入る。第二主題は第一主題のホ短調に対し，定石通りト長調で書かれているが，これも，非常に民族的な匂いの



強い旋律である。展開部では主として第二主題が扱われ再現部では第一主題は原調で，そして第二主題は変イ長調で出てくるが，やがて原調に戻って壮大なコーダへと入って行く。

第二楽章　ラルゴー

「家路より」で知られた有名なラルゴーである。この楽章は大ざっぱに見て複合三部形式と云えよう。先ず管楽器群の奏する和音的な変ニ長調の序奏が厳かに出て来たあと，例のイングリッシュ・ホルンの哀調を帯びた主題が出てくる。次に嬰ハ短調（主題の変ニ長調と異名同音）の中間部がフルートとオーボエのユニゾンで始まり展開されて再び原調の再現部へ戻ってくる。ここでは主題が弦楽器で奏される。

第三楽章　モルト・ヴィヴァーチェ

定石通りこの楽章はスケルツオであるが，その旋律は極めて哀調を帯びたものである。形式は型通りの複合三部で，この楽章も序奏で始まる。次に主題の準備的前奏があるが，これが，ホロトニというギターの調弦と同じ順序で出てくるところなどは，いかにも民族的特質を示していると云えよう。主題はホ短調で現われ，次に木管の奏するホ長調の副主題へと受けつがれる。トリオも三部形式で書かれ，主題，副主題ともに長調の非常に明るい旋律である。コーダでは，この楽章の主題と第一楽章の主題が組み合わされている。

第四楽章　アレグロ・コン・フォーコ

9小節の序奏のあとホ短調の雄大な第一主題が金管楽器で奏され，それはそのまま第一ヴァイオリンへ受けつがれる。経過部のあとクラリネットによってト長調の物想いにふけるような第二主題が奏され，やがて展開部へ入って行く。展開部及びコーダではこの曲の各楽章の主題がすべて取扱われ，巧妙に組合わされているのが大きな特徴をなしている。

交響曲第五番……チャイコフスキー

チャイコフスキーの交響曲全六曲のうち特に有名なのは四番，五番，六番，の曲ですが，この曲はそれぞれ異った特徴をもっていると云えましょう。六番にはその標題「悲愴」が示すような人生の憂愁，苦悩が感じられますが，四番は，その時の彼の環境が左右してか（或は夫人から好意ある援助を受けて財政的な悩みはなかったと思われる時期）明るい感じの非常に多い曲です。さてこの五番は，この両極端の中間に位置するだけあって，上記3曲の中では最もオーソドックスなものであると云われております。曲が完成したのは1888年の夏で，チャイコフスキーの48才の時です。初演はペテルブルグ（今のレニングラード）で作曲家自身の指揮の下におこなわれ，非常な喝采を博しましたが，何故か彼はこの曲をあまり好まず，後にドイツで好評を受けたころから，ようやく自信を持ったと云われています。

第一楽章　アンダンテ＝アレグロ。コン・アニマ

ホ短調4分の4で冒頭に出てくるクラリネットの序奏は，作曲家自身が〝重々しく〟と指定している如く，如何にも誰かが云ったように「鉛色の運命が行進して来る」ような感じを与える。主部は8分の6拍子，クラリネットとファゴットが第一主題を奏でる。この主題は非常にリズミカルなのだが，何となく暗い影をもって聞こえる。ロ短調の第二主題は情緒溢れる雄大な旋律である。展開部では第一主題が素材として扱われクライマックスをつくる。再現部では第二主題は嬰ハ短調となって現われ，やがてコーダに入る。コーダの最後は，通常の曲の如く華々しくなく，最弱音で消えるように終る。

第二楽章　アンダンテ・カンタービレ

この楽章は三部形式になっている。先ず，弦の和音的伴奏の上に，ホルンが素晴らしく抒情的な旋律を奏する。次にオーボエが嬰ヘ長調で明るい節を奏で，次第に発展して，やがて弦楽器にバトンが渡されクライマックスになると，突然第一楽章の序奏の「運命」を刻む旋律がフォルテで出てくる。そのあとは，又元のカンタービレにもどって静かなうちに終る。

第三楽章　アレグロ・モデラート

ワルツである。ワルツは元来軽い調子のもので，構成の大きな曲の中には使用しないのが普通であるが，チャイコフスキーは，この交響曲の中で，スケルツオの代りにこれを用いて成功している。主旋律は冒頭からヴァイオリンで奏されて出てくる。明るく楽しい，軽快な感じ



である。次にクラリネットで，これが短調に変えられて現われ，再び主旋律に戻る。中間部では16分音符の速い形が各楽器を渡り眼やかに発展するが，また主旋律が再現し，終りには又，クラリネットとファゴットが「運命」の序奏を無気味にのぞかせる。

第四楽章　アンダンテ・マエストーソ＝アレグロ・ヴィヴァチェ

「運命」の序奏が長調で明るく力強く出てこの楽章は始まる。主部はアレグロ・ヴィヴァーチェのソナタ形式である。第一主題はホ短調２分の２拍子の派手な，いかにもロシア的なもの。第二主題はフルート，オーボエ，クラリネットといった木管の高音部で奏される。やがて全楽器で第一主題が現われて展開部に入り，再現部へと移って行く。ここでは第一主題が低音楽器で奏され高音楽器は対比的な美しい旋律を奏する。第二主題は嬰ヘ長調で現われる。全曲のコーダはホ長調の壮大な序奏で始まり，軽快なプレストでクライマクスをつくってそのまま終る。

第一楽章　アンダンテ・アレグロ・コン・アニマ

チャイコフスキーの六番「悲愴」に対して，この五番に標題をつけるとすれば，ベートーベンと同じ「運命」がいいのではないかということがしばしば云われますが，それはこの第一楽章の冒頭で重々しく奏せられるクラリネットの旋律がそう感じさせるからです。この序奏のいかめしい主題は，全曲を統一する一つの根本概念と云ってよいかもしれません。

第二楽章　アンダンテ・カンタービレ

三部形式になっておりますが，弦の平和的な伴奏の中で奏するホルンの旋律は全く素晴しいものです。

第三楽章　アレグロ・モデラート＝ワルツです。チャイコフスキーはワルツが好きであったらしく，沢山の美しいワルツを残しておりますが，この交響曲では，スケルツオの代りにこれを使って成功しております。冒頭にバイオリンで奏される主旋律は明るく軽快で楽しい物語りのようです.

第四楽章　アンダンテ・モデラート・アレグロ・ヴィヴァーチェ＝長調の明るく力強い序奏で始まりますが，やがて主部の第一主題が素晴しく派手に出て来ます。ホ長調の荘大な序奏に始まる全曲のコーダは，まさにこの曲のクライマックスといってよいでしょう。

楽器万華鏡

芥川也寸志



ホルン
単純性二重人格者，のどかな角笛の響は，時に一変，強暴にして荒々しきおたけびとなる。いずれにしても屋外的で，ジキル氏とハイド氏の如き暗さはない。より男性的，かつ健康的なり。

ピッコロ
小人の笛。歩はばが小さく，音の間をぬって，敏捷にチョコチョコと駆けまわる。だから，愛敬者。内ポケットに入るので，携帯に便。但し盗難に注意。

ファゴット
とぼけたおやじ。オナラを美化したるがごとき音色を持ち悩みなく憂いなく，バズーカ砲のごとき形態に反して，本性的に楽天家。化けそこなった狸の面構えを想え。



トロンボーン
筋骨美を売物にする男。腕をのばしたりちぢめたりして，筋肉の盛り上るところを見せびらかす。力の権化。もちろん単純なる構造の持主。



チェロ
女流名士。雄弁にして堂々たる貫録。

コントラバス
全世界女権拡張総同盟本部，オバケのごとき巨大なる組織。

トランペット
一寸いかす伊達なにいさん。繊細な頭脳は持たずとも，身体ごとどんと行くタイプ。ときに勇ましく，ときにあらん限りの声を張りあげてラヴソングをうたう。





ヴァイオリン
ミス・ユニヴァース

クラリネット
陽気な若者。一種の享楽主義者。ジャズ喫茶の花形になるかと思えば，ムード喫茶でハバをきかす。小遣に困まればチンドン屋もやる。本来は黒檀製なれど，エボナイト製の普及型あり。エボニーの愛称を持つゆえんなり。



小太鼓
軍隊式無鉄砲型好戦的単純性青年にして，その性格に適当なる役目を与えれば，こわいものなし。ただし倒れるまでブレーキがかからない。

ティンパニー
普段は眠れるごとく，いざというときには一発ドカンとやって全体をひきしめる。名誉総裁型貴重性を持つ。保守的性格の持主なれどその権力や絶大。

オーボエ
憂愁夫人。色にたとえれば濃い紫。季節なれば晩秋。セミなればカナカナの日暮し。涙もろくてしめっぽく総じて陰性。その音，夜泣きのチャルメラに極似す。

フルート
抒情派，白い花の香り。ロマンティストなれど，清潔さが身上。うら若き楽器小屋の乙女。

ハープ
白鳥は悲しからずや……女とはか弱きものなり……愛情は降る星のごとく……野菊のごとき君なれば……かくのごとき言葉の伴奏に好適もってその風貌，おしはかられたし。その原形はミューズの象徴。



ヴィオラ　世話女房。目立たぬが，なければ困る。

第5回定期演奏会によせて

樋口真二

ついさっきまで自分の隣りで仕事をしていた人が，舞台に立って音楽を聴かせてくれる。〝どうだいあのオーケストラの連中は俺達の仲間なんだぜ〟とばかり〝おいうまく弾けよ〟と野次の一つも出したい気持の演奏会だ。だが聴いているうちに段々と胸が迫ってくるのはどうしたことだろう。自分の時間もままならぬ勤労者がここまでくるのは並大抵のことではなかったろう。音楽を演奏するそれも勤労者だけのオーケストラがその困難を乗り越えてこんなにうまく弾いている。日本の労働者も随分と成長した，あの人達も私達も。そんな喜びで胸が一ぱいになってしまう。

労音の会員の誰もがそういう気持で新交響楽団の存在を誇りに思っている。俺達でも何時だってあの中へ飛びこんでいけるオーケストラが目の前にある。新響はそれが存在するという重みがどっしりと心に感じられるオーケストラだ。

特に「私達の音楽を」という要望で初の依嘱作として作られたカンタータ「人間をかえせ」が生まれて，その重みは益々強い実感となってきている。来年度の企画案の中には新響の演奏も入っているが，私達の音楽を私達の手でという要望の果されるのも間近いことだ。正真正銘の私達の音楽会，会員の新響への期待は益々強くなっている．今度の演奏会はその期待を果してくれることを確信している。新響だけが表現できる音楽の感動で，聴く人の全てを感動させてくれるだろう。

第5回の定期演奏会おめでとう。（労音運営委員）

芥川也寸志さんのこと

諸井昭二

夜の10時半，フジＴＶを通して話しかける芥川さん，月曜の〝日本のうた〟のひととき。いつ会っても，いつ見ても，芥川さんの顔は余り変らない。同じ人だから変らないのが当り前と思うだろう，が決してそうでない。彼は余りきどらない。いってみれば常に素顔という訳である．相手が誰でも，気軽く話しかける。例の調子で，片っ方の眉をあげてニヤッと笑う。髪の毛をかきあげる。だが，変らないのはその感じであって，表情ではない。ニヤッの途端に，すごく澄ました顔にもなる。その変化のテムポは，逆に大変激しい。とても追いつけない。芥川さんの本当の素顔は……？　彼はきっと云う「そんなものないよ」。彼の音楽が，その答かもしれない。

（指揮者）

団員募集

「誰方でも，何時でもおいでください。」

○第一オーケストラは演奏を第一義にしているので出演回数が多くなります。その為に練習も多少厳しくなりますし採りあげる曲目も程度が相当高くなります。ですから始めて楽器を持たれる方，始められてから間もなくの方には無理な点があるので多少経験のある方が対象にされる事を望みます。又入団されて１ヶ月はテスト期間になっています。第一オーケストラは少し無理と判断された方は第二オーケストラをおすすめする事があります。特にビオラ，チェロ，コントラバス，ファゴット，ホルン，ティムパニーの団員の入団を希望しています。

○第二オーケストラは全く制限がありません。これから楽器を始めたいとゆう方でも結構です。先生について始めたいと思われる方も，団員が喜んで紹介して呉れるはずです。出演も致しますが練習を重点にしています。

○どちらに入団されても毎月百円の会費と，入団申込書を提出して頂ければ，新響の団員として登録され，団員証を差し上げます。

○先ず見学をしてからとゆう方は練習場に直接「誰方でも何時でも」おいでください。両オーケストラ共練習は公開しています。

尚詳細お問合せは東京労音事業部へ　(291) 5928

第一オーケストラ　指揮　芥川也寸志　毎土曜日午後６時――９時

第二オーケストラ　指揮　諸井昭二　毎火曜日午後６時――９時

練習場　東京文化会館地下リハーサル・ルーム（B）

（国電上野駅下車公園側出口前）



ぼくのアマチュアに関する意見

芥川也寸志

〝ぼくたちはアマチュアですから……〟という言葉はよく聞くけれども，その言葉の裏には，さまざまなニュアンスがひそんでいるように思われる。〝どうせ下手ですよ〟〝楽しむことが第一でね〟〝損得は問題じゃありませんわ〟〝ぼくたち以外のことなんかどうでもいいや〟〝プロに似たようなことはいやだね，けがれたくないからね〟〝……〟etc, etc,

勿論，これらの註釈は，たしかにアマチュアリズムの一面を物語るものであろう。＜くろうと＞よりも＜しろうと＞が下手なことは当り前だし，楽しみのないアマチュアなんてナンセンスに近い。損得を問題にしたらその分だけ楽しみはへろうし，何物にも拘束されない自由な精神こそ，アマチュアのシンボルというべきものだ。また，いたずらにプロの真似をするが如きは，アマたるの厳につつしまねばならぬことに違いない。

しかし，言葉は実に重宝なものである。この〝ぼくたちはアマチュアですから……〟という言葉が屢々，便法として，いわば一種のいいのがれの手段として用いられているようだ。屢々というよりもむしろ殆どの場合がそうなのではないだろうか？

もしも，この言葉が便法として用いられているのであったら，アマチュアの楽しみは，道楽と全く同じ意味しか持たなくなり，あくまでも個人の生活の範囲を超えることはない。

無論，ぼくはそういう楽しみを否定しはしない．道楽としてのコーラス，道楽としてのアンサンブル道楽としてのオーケストラがあって悪いはずはない．しかし，その楽しみは，決して集団の楽しみとはならないだろう．その楽しみをみんなのものにするためには一つの共通した目的意識を持つことだつまりイデエを持つことだが，これは音楽における一つの運動に他ならない．自分の楽しみが同時に他人の楽しみになる――簡単にいえば，運動の楽しみとは，こういう性質のものであろう。

新しい日本の文化的特徴の一つは，一部に優れたものがあってもそれが少しも全体のものになってゆかないという点であろう．それを実証する材料は，いくらでも見つけ出すことが出来る。

理由は簡単だ。優れたものと，その反世界ともいうべき末端との差が，あまりにひらきすぎているからである。

じゃあどうすればいい？　その答も簡単である。気の長い話かもしれないし，まだるっこしい話かもしれないが，とにかく全体が少しずつでも高まる以外に方法はない．そして，そこにこそ，音楽運動の本来の意味がある。――

その意味を全うするためには，まず，たとえアマチュアであっても〝どうせ下手ですよ……〟という意識を捨てなければなるまい。下手でいいのではなく，やはり〟断じてうまくなくてはいけない――あるいは，うまくならなくてはいけない――あるいはうまくなろうとしなくてはいけない。

音楽の価値は，うまいかまずいかではきまらないというのはぼくの持論でもあり，アマチュア音楽の意義を強調する場合のきまり文句でもあるわけだがそれでも尚，うまいかまずいかは，依然として，音楽の価値をきめる有力な尺度であることは，周知の如く厳たる事実である。

また，楽しむことも必要には違いないが，苦しみを恐れていては運動の壁をつき破ることは極めて困難だ。例えば一つのアンサンブルの中で，技術的に巧拙の差が大きくなりすぎた場合，思想的な対立が起きた場合，外的制約が大きくなった場合，その他に，大きな壁がみんなの前に立ちふさがる。その壁をのり越えることは，実際生やさしいことではない．しかし，その障害を突破したとき，はじめてアンサンブルのよろこびや楽しみは，運動の実感とともに，みんなのものとなるだろう。

損得はたしかに問題にならぬかもしれぬし，プロの真似をしても何の意味もないかもしれぬ。しかしアマとプロとを単に経済的概念のみで区別することは，ほとんどナンセンスに近い。スポーツにおけるアマ規定の如きものを，音楽にあてはめたら，およそ音楽運動などというものは成り立たない。もしもそれをアマの純潔と考え，誇りと感じ，節操だと思うのなら，思い違いもはなはだしい。

それどころか，活動によって少しでも収益をあげそれによって個人の生活がなにがしかでもプラスになることが出来れば，それが一番望ましいことだとぼくは考える．たとえ，その収益が，ラーメン一ぱいに満たなくても，それを恥じる必要はない。その収益がささやかなものであったという点においてもまた，ささやかながら収益を得たという点においても――．

その形態においては，全くプロと同じでありながら，尚，燦然として光り輝いてこそ，アマチュアリズムの名にふさわしいのではないだろうか。このぼくの意見は，屢々大きな誤解をもって迎えられたが新交響楽団とともに歩いたこの数年間は，ぼくにますますその確信を抱かせた。

今の日本で，アマチュアの果す文化的，音楽的役割は計りしれぬほど大きい。〝ぼくたちはアマチュアですから……〟が，もっと自然で，もっと明るくもっと楽しそうに，もっと誇りに満ちた口調で語られることをぼくは期待する。